SHOW-HEYシネマルーム

★★★★★

ミッドナイト・イン・パリ

2011年・スペイン、アメリカ合作映画
配給／ロングライド・94分

2012（平成24）年3月5日鑑賞　GAGA試写室

Data

監督・脚本：ウディ・アレン
出演：オーウェン・ウィルソン／レイチェル・マクアダムス／マリオン・コティヤール／キャシー・ベイツ／マイケル・シーン／エイドリアン・ブロディ／カーラ・ブルーニ／コリー・ストール／レア・セドゥー

みどころ

「タイムスリップもの」は多いが、ウディ・アレン監督がそれをつくると・・・？パリの「黄金時代」は１９２０年代？１８９０年代？それともルネサンス期？それは人それぞれだが、人間は誰でも現在に不満を持つ動物かも・・・。

アカデミー賞脚本賞を受賞したユーモア溢れる軽妙なストーリー展開を楽しみながら、観光の都パリ、芸術の都パリを満喫したい。そして、苦しい決断（？）の中で訪れる思いがけない（？）ハッピーエンドを、共に祝福しよう。

■□■パリを舞台にした、遊び心いっぱいの脚本に注目！■□■

第８４回アカデミー賞は作品賞、監督賞他計５部門を受賞した『アーティスト』（１１年）が圧倒的な強さを発揮した。そんな中、作品賞、監督賞、脚本賞、美術賞計４部門にノミネートされていた本作は、脚本賞を受賞！観光立国を目指し２００３年に「観光立国宣言」した日本は、２００４年6月の景観法の制定を含め順調にその政策を進めてきたが、２０１１年の３・１１東日本大震災によって一時的に頓挫した。そんな中、橋下徹大阪市長率いる「大阪維新の会」は２０１２年1月に「大阪１０大名物構想」を発表した。これは堺屋太一氏のアイデアだが、これくらい思い切ったことをしないと大阪に１０００万人を超える観光客を集めることなどとても無理。それに対し、芸術の都、花の都パリは観光の都で、パリを訪れる観光客は毎年４５００万人、その6割は国外からの人々だ。

本作の主人公ギル・ペンダー（オーウェン・ウィルソン）は婚約者イネズ（レイチェル・アクアダムス）の父親の出張旅行に便乗してイネズと共に心から愛してやまないパリにやって来たが、今は1人で真夜中のパリをふらついていた。これは、ギルたちの前に現れた

イネズの友人のポール（マイケル・シーン）の方がギルよりも一般的なパリ観光をしたいイネズにとって何かと便利なためだ。しかして、時計台が午前０時の鐘を鳴らし、目の前に停まったプジョーに乗ると、突然ギルは１９２０年代にタイムスリップ。そして、ギルの前にはその時代の多くの芸術家たちが登場し、考えられないようなファンタジックな世界が展開していくことに・・・。そんなことありえねー。そりゃたしかにそのとおりだが、世界一の観光地パリでは法律違反でなければ何でもあり！ウッディ・アレンが監督４２作目の脚本として書いた、パリを舞台とした遊び心いっぱいの脚本に注目！

■□■「内向き」日本でも、これくらいの名前は・・・■□■

イギリスのエリザベス女王は今年２月に女王在位６０年を迎え、今年６月には多くの祝賀行事が行われるが、イギリスの「黄金時代」は、『エリザベス：ゴールデン・エイジ』（０７年）（『シネマルーム１８』１７４頁参照）で見たように、１６世紀のエリザベス１世の頃（在位１５５８～１６０３年）。それに対し、芸術の都パリの「黄金時代」はギルの考えるところでは、１９２０年代らしい。映画冒頭、軽快な音楽が流れる中でエッフェル塔、凱旋門、セーヌ川、ムーラン・ルージュ等々パリの美しい風景が映し出されるが、東京だって今年５月に東京スカイツリーがオープンすれば、すばらしい観光名所になるはず。また、中国からの観光客は今のところ、東京、箱根、富士山、名古屋、関西の「ゴールデンルート」に片寄っているが、馮小剛（フォン・シャオガン）監督の中国映画『狙った恋の落とし方。（非誠勿擾）』（０８年）で人気が高まった北海道はもとより、ＬＣＣ（格安航空会社）の普及や、昨年１１月就航した上海から長崎のハウステンボスまでの船便の運航開始など、観光客誘致のアイデアはいくらでもある。まずは、そんなパリの観光地のすばらしさを再確認したい。

他方、日本では１４～１５世紀の室町文化や１７～１８世紀の元禄文化などで文化の花が開いたが、１９２０年代の「黄金時代」のパリに集まった芸術家たちとは？まず、タイムスリップした第１夜にギルが出会ったのは、スコット&ゼルダ・フィッツジェラルドの作家夫婦やピアノ弾きのコール・ポーター、パーティー主催者のジャン・コクトー、そして敬愛するアメリカの小説家アーネスト・ヘミングウェイ（コリー・ストール）たち。そして第２夜に、ガートルード・スタイン女史（キャシー・ベイツ）のサロンでガートルードと絵画論を闘わせていた気難しいスペイン人は、パブロ・ピカソだった。さらに、第３夜以降はスペインの画家サルバドール・ダリ（エイドリアン・ブロディ）、スペイン生まれの映画監督ルイス・ブニュエル、アメリカの画家マン・レイなどそうそうたる芸術家たちが登場する。しかして、あなたはこれらの芸術家の名前を知ってる？まずは、いくら「内向き」日本でも、パリの「黄金時代」を彩ったこれくらいの芸術家の名前は知っておかなければ・・・。

■□■「あっちもいいが、こっちも」でホントに大丈夫？■□■

ギルはアメリカでは売れっ子脚本家として成功していたが、ホントはくだらない脚本書きには飽き飽きしており、本格的な作家への道を目指していた。そんなギルにとって、ピ

カソの恋人らしい美女アドリアナ（マリオン・コティヤール）の魅力もさることながら、『老人と海』『武器よさらば』『誰がために鐘は鳴る』等で有名な作家ヘミングウェイとの接触は願ったり叶ったり。ガートルードのサロンで自分の書いた小説を試しに読んでもらうと好評のようだから、自信もチラホラと。

こんな風に夜な夜な１９２０年代へタイムスリップして夢のような時間を過ごしているうちに、ギルの関心が次第にイネズからアドリアナに移っていったのは当然。もっとも、逆にイネズの方も、最近変なことばかり口走るギルより、パリの観光名所でうんちくを傾けて語ってくれるポールの方に何かと惹かれていったのも当然だから、２人の仲は次第にヤバイことに・・・。もちろんギルにとってはイネズとの結婚は大前提だが、「あっちもいいが、こっちも・・・」と言っていてホントに大丈夫？

Photo by Roger Arpajou (c)2011 Mediaproducción, S.L.U.,Versátil Cinema, S.L.and Gravier Productions, Inc.

■□■１９２０年代より１８９０年代の方がもっと・・・■□■

ウッディ・アレン監督作品の特徴は、何と言っても皮肉とユーモアがタップリ詰まった人生観とストーリー展開の軽妙さ。『ミッドナイト・イン・パリ』というタイトルにふさわしく、夜毎主人公が１９２０年代のパリにタイムスリップしていくという本作は何でもありの展開が可能だから、美女アドリアナとの遭遇、多くの芸術家たちとの遭遇の中でギルが夢見心地になり、次第に現実から遊離していったのは仕方がない。

イネズという婚約者がいることをアドリアナに知られたギルは一旦はまずい状況に陥ったが、そこは持ち前の厚かましさ（？）でカバー。そして、キリマンジャロから帰ってきたアドリアナとキスを交わしたところまでは最高だったが、２人が乗り込んだ馬車が行き着いたのは１８９０年代のパリだったから話は少しややこしいことに。すなわち、２０１

０年の今を生きているギルは１９２０年代のパリが最高だと考えていたが、１９２０年代を生きているアドリアナはタイムスリップしたことによって飛び込んできたロートレックやドガ、ゴーギャンが生きている１８９０年代が最高と考えていたから、２人の価値観が少しズレることになったわけだ。さらに、ロートレック、ドガ、ゴーギャンたちは口々に１８９０年代のパリよりもルネサンス期のすばらしさを語っていたから、結局人間が考えるのはいつも今の時代への不満と昔へのノスタルジア・・・？

夜な夜な１９２０年代にタイムスリップしていたギルは現実に生きている２０１０年の時代を忘れてはおらずいつも引き返していたが、アドリアナは１９２０年代に戻らず１８９０年代に留まると宣言したから事態は大変なことに・・・。そんなアドリアナの決意はホントに固いの？そして、そんな状況下ギルはどんな決断を・・・。

■□■ハッピーエンドは思わぬ伏兵（？）によって・・・■□■

新婚旅行の初夜でケンカしたため、新婚旅行から帰ってきた途端に離婚。そんな夫婦も時々いるが、ギルとイネズの場合は婚前旅行だから別れるなら今のうち・・・。まさかそう考えたわけではないだろうが、ギルがどんな思考経路を経てイネズと別れる決心をしたのかは、軽妙な展開の本作唯一のシリアスな部分だから、じっくりあなたの目で確認してもらいたい。

本作には、イネズとアドリアナという２人の美女が登場するが、なぜか映画前半ギルとイネズがポールたちと連れ立ってパリ観光に出向いた際、ちょっとしたお店でちょっとした会話を交わす女性ガブリエル（レア・セドゥー）が登場する。この時点ではガブリエルの登場はストーリー展開上何の意味もないと普通は思うのだが、ウッディ・アレン監督作品には伏線やワナが仕掛けられていることが多いから、この美女にも後半何らかの意味が・・・。そう睨んでいたとおり、映画のラストに向けてこのガブリエルが存在感を示すからそれに注目！

別れる決心をするのは男も女もつらいものだが、ギルはイネズとアドリアナどちらを選択？まず、ギルがイネズと別れてアドリアナと一緒になろうとすれば、２０１０年の今を切り捨てなければならないが、ギルはそれができるの？また、たまたまタイムスリップしてしまった１８９０年代にアドリアナが残ると言えば、ギルもその決心をしない限りアドリアナと別れざるをえないが、ギルは・・・？他方、ギルが夜な夜なタイムスリップしている間にイネズはポールといい仲になっているようだし、イネズの父親が探偵に調べさせたところではギルの夜な夜なの素行はかなり悪いうえ、探偵そのものが消えてしまったから何かしら危うさが・・・。そんな中でギルが下した決断は男らしいものだったが、それってかなり寂しいのでは・・・？もちろんパリのまちは恋人同士が１番お似合いだが、哀愁いっぱいの１人歩きにもパリのまちはよく似合う・・・？たしかにそうだが、やっぱりハッピーエンドの方が・・・。しかして、本作のハッピーエンドは思わぬ伏兵（？）によって実現するから、いかにもウッディ・アレン監督らしいそんなラストに注目！

２０１２（平成２４）年3月6日記